

アメリカ帝国の発展構造・覚え書

清水 知久

1 まえがき

本稿は今後筆者のおこなおうとする勉強の出発点ともいうべきものであり、それを超えるものではないことをまずことわっておきたい。覚え書とせざるを得ない所以である。

ある一国を勉強する場合、とくにその国の歴史や文化・社会の特質を考えると、他の国と比較をするという作業がよくおこなわれる。むしろ「特質」というときには、無自覚であっても実は比較しているわけだが、他国にくらべれば、アメリカ合衆国は自覚的な比較研究の対象であった。合衆国人であれ、他国人であれ、合衆国を対象とする人びとは、おしなべて、西欧との比較をおこなってきた。アメリカの資本主義・帝国主義を勉強する人にせよ、政治制度や思想・文化を学ぶ人にせよ、西欧はほとんどつねに合衆

アメリカ帝国の発展構造・覚え書（清水）

国をはかる尺度でありつづけたといっても過言ではないだろう。筆者もまた、この方法の有効性、のみならず不可避性をも認めるひとりだが、こうした方法について、若干の補足をしておきたいと考える。

その補足とは、とりわけ第二次大戦後に明確になった事実およびその意味から発するふたつのことである。ひとつは戦後西欧の経済復興および繁栄をもたらした有力な一因である多数の外国人労働力であり、他のひとつは南アフリカ共和国のアパルトヘイト制度である。（註）

一九七〇年現在、北・西欧全体で、ユーゴスラビア、イタリア、ギリシア、トルコ、中東・アフリカ諸国からの労働者は約五〇〇万（内、西ドイツに約二〇〇万）に達するが、彼らの大半はいわゆる出稼ぎ労働者であり、合衆国を訪れるような移住者ではない。またアパルトヘイト制度下の労働とは、なかば奴隷的とはいえ奴隷労働そのものではなく、アフリカ人は賃労働者であり、彼らは南アにおいて

多数者でもある。しかし、西欧に働く「新しい奴隷」にしばしばとえられる外国人労働者の賃金、生活状態、職種などを僅かでも知り、また南ア白人の高い生活水準、経済成長の規模と内容、アフリカ人労働者の実状について断片的にせよ知識を得ると、現在の西欧、南アを尺度のひとつとして、合衆国が「移民の国」たることの意味やその奴隷制を考えてみたいという誘惑にかられる。逆にいえば、現在の西欧や南アは、何十年、一世紀、数世紀の遅れがあるにせよ、あらためて合衆国史の発展構造から学びとっているのではないかと、一度は口にしてみたい気にさせられる。だからときおり「奴隷制度をもっていたときの合衆国のイメージに参考になるのは、いまの南アではないか」とか「こういううまい手で合衆国は豊かに強くなったのだと、西欧人は思っているのじゃないかしらん」などと、筆者は実際に口に出すのである。

註 在欧外人労働力が西欧資本主義の復興・繁栄にいかにか寄与したか、アパルトヘイト制度のもとで低賃金で働かされるアフリカ人労働者がいかに南ア白人支配層を富ましめ、さらに世界資本主義の搾取体系においていかなる位置を占めているか、ここでは「論証」はしない。詳しくはたとえば次の二つを参照。『Europe's Migrating Workers』, *Newsweek*, March 20, 1972, pp. 12-15. 野間寛二郎『差別と叛逆の原点』

理論社、一九六九年。

2 本稿の論旨

以上のことは白状すればあってもなくてもよいまえがきである。筆者がこの覚え書でいいたいことは簡単すぎるほどのものである。四年前(覚え書の形では五年前)筆者は合衆国史は帝国の歴史であると述べたが、そのときの帝国とは、もつとも簡単に要約すると、資本主義的差別の全体系のことだった。この考えはもちろんいまも変わりはないが、差別の意味は必ずしも明確ではなかった。黒人、インディアンに対する既知の常識的な抑圧像ともいえるべきものに依存したにとどまった。また、合衆国史の発展構造を帝国の膨張として扱えたが、帝国のメトロポリス内部における問題、階級関係といわずとも労働、労働者の問題に関する言及はきわめて不十分であった。

差別——制度・慣行およびその行使——とは、賃労働対資本、あるいはプロレタリアート対ブルジョアジーという階級関係を合衆国の歴史により具体的に即していうとき、資本家が安い労働力を不断に外国から入手し使用するための社会制度と考えた方がよい。(これに依拠して、既存の労働者は遅着のより安価な労働力に押しあげられて、あるい

は踏み台として、相対的に上昇することを期待するという意味で、資本家に対する副官的役割を演じやすい。)合衆国史に即していえば、奴隷労働を拒み、かつまた奴隷労働に「不適合」とみなされ、さらに一般に低賃金労働の担い手たりえずとみなされたインディアンは絶滅と放逐の対象として切り捨てられた。人種的・民族的差別とは、この資本制下で安い労働力の供給を保障するものとしても創出され、その後はほとんどもっぱらそのために再生産されてきた。このことは、一七世紀以降の黒人のありかたを考えてみればまず明白であろう。(註)

「移民の国」とは、「多様性」とか「機会・約束の地」などという以前に、海外から安い労働力が不断に供給されてきた事実、あるいは入手してきた事実の認識を欠いては、ほとんど無意味な表現であろう。ここでは、一八二〇年から一九七〇年までに四五〇〇万を数えた移民たち——むしろその大半が当初は安い労働力だったし、げんに、またそうである——のいちいちを、時代を追って記すことはしない。以下に特徴的な事実のいくつかを列挙するだけで、本覚え書の論旨には十分なのである。そしてそれらの事実もほぼいわば周知の事実には属するものであり、格別の新事実が提示されるわけでもない。

註

以上のように述べたからといって、新着の外国移民だけが安価な労働力として搾取されたわけではないことはいうまでもない。たとえば一九世紀末の三〇年間から二〇世紀のはじめにかけて急速に進行した都市化とは、農村からの安い労働力の流入を意味した。農村出身の労働者は移民労働者と同様に搾取された、一例をあげる。一八七五年、カーネギー鉄鋼会社のある工場長は次のように語っている。「われわれは、高賃金、低生産、ストライキをやかましく求めるイギリス人をでさるだけ避けねばならない。私の経験からいえば、ドイツ人、アイルランド人、スエーデン人、そして私が『そば粉』と名づけるアメリカ農村出身の若者たちをうまくまぜ合わせれば実直で扱いやすい労働力にすることができるのだ」(Quoted in Oscar Handlin, *Immigration as a Factor in American History*, Englewood Cliffs, N.J., 1959, pp. 66-67.) 一般的にいえば、出身を問わず、労働者は可能な限り安い労働力として搾取される。だがここでは、農村出身の労働者を移民労働者と「うまくまぜ合わせれば」ということに注目するのであり、さらに同じく一般的に、非移民系労働者に対する搾取も、黒人、および移民労働者の存在と流入によって具体化され、合理化された側面を重視しているのである。

3 ゴン・パースと社会党の態度

「移民はたえず新たな労働力を供給した。そうした労働

力とは、アメリカ経済のなかでもっとも魅力がなく、そのうえもっとも報酬の低い地位についてくれるような人びとつまり貧農的ヨーロッパで定着した低度の期待をたずさえてやってきたような人びとである。」(註1)

一般に、各時代における最近着の移民労働者は、もっとも骨の折れもっとも賃金の低い職業に就いたことはよく知られる事実であり、これがすぐさま先着労働者の上昇に結びついたか否かは速断はむずかしいが、たとえば象徴的な一事実に次のようなものがある。ニューイングランドの紡績工場労働者は、一八二〇年代から四〇年代まで主として農村出身の女子工員が占めていたが、四〇年代以降六〇年代まではアイルランド系移民が、六五年以降は、イタリア、ポルトガル、ギリシア系労働者およびフランス系カナダ人にとって代わられた。こうした事実は紡績業のみならず鉱山や金属工業でも相次いで進行した。鉱山や金属工業における重労働には、はじめはイギリス系、ウェールズ系が従事していたが、やがてハンガリー、ポーランド、イタリア、ユーゴスラビアその他の東・南欧系の移民にとって代わられた。また二〇世紀初頭の石炭、鉄鉱、鉄鋼などの重労働・低賃金産業には、スラブ系移民が多く働いていた。こうした事実は、イリノイ運河その他の水路建設におけるアイルランド系、鉄道におけるアイルランド、スラブ、イタリア、

中国、メキシコ系の「貢献」など、時代と地域こそ異なれ数多く生じた。(註2)

このような一般的事実からも、本稿の論旨はある程度裏づけられるのであるが、以下では、サミュエル・ゴンパース、AFLおよびアメリカ社会党の移民問題および移民労働者に対する態度に言及する。表面的には中国人労働者の問題が浮かびあがるが、問題の本質は中国人のみには限定されないことを強調しておきたい。

サミュエル・ゴンパースおよび初期AFLの移民政策については、詳述は不要であろう。その簡単な要約に、たとえば小林英夫『サミュエル・ゴンパース』(ミネルヴァ書房一九七〇)の九八―一〇四頁がある。一般的にいえば、一八九三年、ゴンパースは、「東および南ヨーロッパからの移民については同化の困難なところから……かれらより『アメリカを守る道』として文盲者の排除を提案し、AFLは主として『読み書きテスト』を軸として移民制限の立場をもちつづけた。」

一八八一年の第一回大会における綱領委員会の報告は、賃金労働者保護のための立法を一四項目含んでいたが、そのうちの三つとは、低賃金外国労働者に対するアメリカ産業の保護、契約外国労働者の移民を禁止する法律、中国人の閉めだし、であった。中国人排斥はその中でもとくに注

目され、これを要求する宣言が大会で採択された。これは「サンフランシスコの太平洋沿岸職業・労働組合が、彼らのもっとも緊急な難問題を説明するために」派遣したチャールズ・バーグマンが、大会の最終日に「中国のクレーリーの入国を禁止する必要を述べた」ことに負うところ大であるようだが、ゴンパースおよび初期AFLにとっても、中国人労働者排斥はきわめて重要な問題だった。ゴンパースは自伝『七〇年の生涯と労働』で次のように述べている。やや長いが示唆するところ大なので引用しておく。(註3)

「一八七八年には、全国四万の葉巻工のうち、少なくとも一万は、太平洋沿岸の葉巻産業に雇われている中国人であった。適応性と模倣力は短期間に、蒙古人種の熟練労働者をつくり上げた。彼らの生活水準は、白人のそれよりはるかに低かったため、彼らは白人がとうていやって行けないような賃金でも喜んで働くのであった。保護措置がとられなければ、全産業がやがて『中国化』されることは明らかであった。当時別個に組織されていた太平洋沿岸の白人葉巻工は、白人の規格にしたがってなされた白人の仕事と区別するために白いラベルを用いていた。しかし地方組織では、西部に氾濫しようとしていた大量の中国移民の流入を防ぎきれぬものではなかった。

「カリフォルニア州は、中国人労働者を排除する権能をアメリカ帝国の発展構造・覚え書(清水)

持たず、したがって連邦法がどうしても必要であった。

われわれの国際組合は、中国人葉巻工との競争は当時太平洋沿岸に限られていたとしても、東部の葉巻産業は、結局、西部の葉巻産業とすべての市場で競争しなければならぬ事実を認めていた。しかし、われわれ単独では保護立法の制定を図るだけの力はなかった。東部で行われたいくつかのストライキのとき、使用者側は中国からスト破りをつれて来るといつて脅しをかけた。葉巻工が早くから労働組合の全国組織化運動に熱心な支持を寄せるにいたったのは、このことも一因となっている。中国人締め出しに賛成のすべての労働者の助けが必要であったからである。」

ここに意味されていることは明確であろう。同時に、白人葉巻工の存立を極度に脅やかす中国人葉巻工の存在は、決して狭義の経済的意味にとどまるものではなかった。ゴンパースは一八九〇年三月、サンフランシスコに赴いて、「観光客用に特別に用意されたコースではない本物のチャイナ・タウンを見学した。」彼は何を見、思ったか。「それは恐ろしい経験だった。私はダンテの地獄篇を読んだことがあるが、チャイナ・タウンはその悪臭・落ちぶ果てた人間・賭博・そして気違いじみた放縦さから見て、地獄篇以上に恐ろしく見えた。その光景は私の心に焼きつき、後年、中

国人の移民が問題になった時、その夜の光景がなまなましく私の心によみがえってきた。」

以上の認識が最も具体的にあらわされたのはむろんカリフォルニア州における反東洋人扇動であった。一八七〇年から一九二〇年にわたる同州での反東洋人扇動は、当初からサンフランシスコに本拠をもつ強力な労働組合運動によって指導・支援され、財政的援助をうけていた。その中心はアイルランド系移民労働者であり、彼らは反東洋人扇動の指導者の大半を占め、同時にまたサンフランシスコ労働運動の指導者でもあった。ケアリー・マックウイリアムスによれば、「東洋人移民が現実にカリフォルニア州の米人労働者に常にとつて代わつていたとか、あるいは東洋人移民がカリフォルニア州の労働基準をいつまでも必ずおびやかすということを裏付けるには、科学的掲掲がいつも欠如していた。しかし、七〇年代のカリフォルニア州の混沌とした状況のもとにおいては、『中国人は帰れ』よりも効果的なスローガンは到底考えられなかった。加えて、当時アイルランド系移民は、東部の工業地域では非難され、悪口をいわれていた。西部太平洋沿岸地域での東洋人に対するアイルランドの攻撃は、こうした自分たちに対する攻撃を埋め合わせるという傾向をもっていた。」^{註4}

マックウイリアムスはゴンパースとは逆に、反中国人扇

動を経済的側面よりも政治的側面が強かったと指摘しているが、これをかりにそのまま認めるにしても、やはり労働およびその指導者が扇動を指導し支援したことは重要である。また東部でのアイルランド系移民が「非難され、悪口をいわれていた」理由は、唯一ではないにしても彼らの低賃金労働に求められる。彼らが彼らに向けられていた「攻撃を埋め合わせるという傾向をもっていた」事は、単に政治的、経済的側面のいずれが重要であったかという問題をこえて、低賃金労働を基底とした差別の重層的構造および波及的性格ともいふべきものを指示しているといふべきだろう。

もう一点指摘しておきたいのは、カリフォルニアにおいて生じた反中国人扇動を、単にこの時期のカリフォルニアのみの事象と考えるべきではないだろうということである。再びマックウイリアムスの表現をかりると、彼は「七〇年代のカリフォルニアの混沌とした状況」というが、この種の「混沌」は、この時期のカリフォルニアに限ったことではなかったろう。扇動の対象や程度は異にすれ、大量の移民の流入を迎えて急速な工業化が進展した地域や都市も、「混沌」という表現にふさわしい状態を呈していた。具体的な指摘は避けるが、くり返しているなら、ゴンパースおよびAFLの態度、政策は、カリフォルニア的な状況と

それへの対応の全国的な表現とみなすべきだろう。同時に二〇世紀に入ってからのカリフォルニアの動向、つまり「猛烈に親労働者のな勢力と猛烈に反労働者のな勢力が相よつて反東洋人的感情をあおりたてようとした」こと、また一九〇〇年代の後半から日系人強制収容に至る時期において反東洋人扇動に巨大な力を發揮した組織「黄金期西部アメリカ生まれの息子たち」が中国人、日本人、黒人およびメキシコ人を除外する「リリ・ホワイト党员」の組織をもつていた事実などは、カリフォルニアが特殊な例ではないことを示してもいた。

次にアメリカ社会党が外国移民労働者についていかなる態度をとっていたか、簡単にふれておこう。周知のようにアメリカの社会主義者にとって、移民の流入と存在は組織化Ⅱ党勢拡大の対象であるとともに、巨大な困難の一大根源でもあった。

「アメリカ社会党は、アメリカ労働者の組織を弱め、労働者の生活水準を低下させる目的のために、雇用者階級によつてなされる諸外国からのストライキ破り、契約労働者の移民および労働者の大量輸入を阻止するすべての立法に賛成する。

わが党は人種、出身国を理由とする移民の排除に反対し、かつ政治、宗教、人種の故をもつて母国政府に迫害

アメリカ帝国の発展構造・覚え書(清水)

されているすべての男女にとって、合衆国がつねに自由な避難所たるべきことを要求する。」^{註5}

これは、一九一〇年のアメリカ社会党大会で採択された移民問題に関する多数派報告の一節である。前半と後半との間に、矛盾とまではかりにいわずとも、あいまいさが存在することはだれしも認めるだろう。まえにあげたAFLの場合と同様に、社会党もまた移民労働者の大量流入に悩み、労働者の国際連帯をかかげるがゆえに、苦悩はいつそう深かったといわねばならない。ここでくどくど述べるまでもなく、アメリカ社会主義運動は移民労働者の問題と苦闘をつづけ、そして一九一〇年大会はこれをめぐる党内対立の激化を迎えて、前記のようなあいまいな決議の採択で一応の妥協が成立したのだった。

大会に提出された当初の多数派報告は契約労働者のみでなく東洋系移民の流入をも制限すべきというものであったが、左派を代表するユージン・デブスは人種を理由とする排除の思想と政策は「私利のみを追求するブルジョア的なものであり、全世界の抑圧され搾取されている労働者に解放のために団結せよと呼びかけている国際的な運動の旗の下に集うプロレタリアの集会には無縁のものである」と強い反対の立場をとったのである。労働者の国際的連帯を一貫して追求する立場からいえば、デブスは首尾一貫した原

則論を展開したといえるが、教義上の正しさはともかくとして、彼の議論が現実的な有効性をもっていたかといえはそれはなほだ疑わしいのである。すでに A.F.I. およびゴンパースの項で記したように、デブスが原則において好むと好まざるとにかかわらず、安い労働力の流入から自己を守ることに、そして同時に自己防衛は人種的偏見によって強化され、さらに再び逆流して自己防衛にいつそう努める——これがアメリカ労働者、とくに組織労働主流を支配した傾向であった。

社会党大会において採択された決議のあいまいさは、次のようなモリス・ヒルキットの見解によって、その一部は解ける。ヒルキットは党機関誌『インターナショナル・ソーシャリスト・レビュー』誌一九〇七年八月号で次のように述べていた。外国移民は消費者でもあり、経済成長を助ける、移民のもたらす弊害は児童労働・婦人労働などと同様に資本主義の弊害に外ならず例外的なものではない、また農村から都市への移住に等しく経済状態の諸結果であるなど、ヒルキットはこのように議論を展開し、移民の排斥ではなく、組織化が労働組合の任務であると主張する。しかしそのヒルキットも、社会主義者は組織労働の移民に対する態度を無視はできないとして、次のように述べざるを得なかった。

「汽船会社、不動産業者、その他の営利企業の利益のために、人為的に促進される移民は、移民受入国の労働者にとっても移民送出国の労働者にとっても有害であり、すべての国の社会主義者と労働者はあらゆる手段を用いても妨害しなければならぬ。スト破りや労働者組織の弱化、破壊を目的にした外国労働者の輸入は、社会主義者にも労働組合にも損害を与えるものであり、これらの資本家的行為を防止する手段のすべてを、社会主義者は全面的に支持する。そして最後に、アメリカ社会主義者の大多数は、近代的生产の分野にまだ加わってえず、選出した国の労働者に同化できず、労働者階級の組織と闘争に参加できない人種および国家の労働者は入国させるなどという労働組合の要求を支持するものである。この要求は自己保存という自然な本能の直接的な表現に外ならない。」

「自己保存という自然な本能」を認めることが「社会主義」的であるか否かはともかく、「本能」として認めれば、それは差別と偏見の容認につながることは否定できないであろう。そのさい、ゴンパースとヒルキットの差はいわば五十歩百歩である。「自己保存」の立場から中国人排斥を唱えたゴンパースは「地獄篇」以上のものをチャイナ・タウンに見出した。カリフォルニアの場合も、アイルランド系の

労組および労組指導者に発した中国人排斥は、「リリ・ホワイット党員」らによる有色人一般の排斥に拡大せられていった。それをつらぬくのは、ヒルキット流にえば「自己保存」という自然な本能」による合理化だった。それと同時に、この合理化を支えていたもの、促したものは、いうまでもなく、外国からの低賃金労働者の流入と存在であった。新来者はやがて先着者となり、新たな新来者＝低賃金労働者に対して「自己保存」を図り、その「自然な本能」を表現せねばならぬ。こうした過程が不断にくり返されてきたのである。その過程は、いわば恒常的新来者である黒人を対象としてもっとも明確にあらわれてきたことはいうまでもなく、また第二次大戦後はたとえばメキシコ人労働者に対して顕著に示されている。

4 メキシコ人労働者の場合

註(1) Stephan Thernstrum, "Urbanization, Migration, and Social Mobility in Late Nineteenth-Century America,"

in Barton J. Bernstein, ed., *Towards a New Past*, London, Chatto & Windus, 1970, p. 162.

註(2) たとえば次を参照。William S. Bernard, "Economic Effects of Immigration," in Benjamin M. Ziegler, ed., *Immigration*, Boston, Heath, 1953, pp. 50-51.

註(3) 以下のゴンパースの発言はすべて下記の邦訳による。
S. ゴンパース自伝刊行会訳『サミュエル・ゴンパース

アメリカ帝国の発展構造・覚え書(清水)

自伝、日本読書協会、一九六九、上巻、二二二—二二九—二九一—三〇四ページ。

註(4) 以下のカリフォルニアに関する部分は、Carey McWilliams, *Prejudice*, Boston, Little, Brown, 1944 第二章による。訳文は主として下記の邦訳によった。鈴木二郎・小野瀬嘉慈共訳『アメリカの人種的偏見』(新泉社、一九七〇)

註(5) 基礎史料は党機関誌 *The International Socialist Review* であるが、本稿では下記から訳出した。
H. Wayne Morgan, ed., *American Socialism, 1900-1960*, Englewood Cliffs, N. J., Prentice-Hall, 1964, pp. 78-82.

一九二四年移民法はたしかに移民を大はげに制限し、日本人移民に対しては「絶対的禁止」といってよい内容をもっていたが、これによって生じた空白、つまり低賃金労働者の供給不足を埋めたのがメキシコ人労働者であった。公定移民統計は一九二一年から三〇年の一〇年間に、メキシコ系移民が四五万九〇〇〇に達したことを告げている。これは国別でいえば、カナダ、ニューファンドランドの九二万四〇〇〇を除くと、イタリアの四五万九〇〇〇をしのぐ

数である。すでに二〇年代以前に、メキシコ系移民は中国人除外法や「紳士協定」のもたらした空白を埋めており、一九一〇年代の移民は二一・九〇〇〇を数えた。彼らに加えて、はっきりした数は不明だが合法・非合法の季節労働者と移民があり、一般的にいつて、彼らの西部、とくに南西部の経済発展に対する寄与は広く認められている。大ざっぱな推計によれば、一九一〇年代から二〇年代にかけてメキシコ系労働者は西部鉄道労働者の九〇%、農業労働者の八〇%、鉱山労働者の六〇%を占めていたという。(註)

彼らはおしなべて低賃金労働者であり、たとえば鉄道労働者の場合、一九〇八—一九〇九年において、当時の低賃金労働者であったイタリア系、ギリシア系、日系労働者よりも低い賃金で働いていた。メキシコ系労働者は、高くて一日一・二五ドルよりすくなく、これに対して伊・希・日系労働者は一・二五ドルを上まわり、一・五〇ドル以上もいたという。鉄道のみならず、他産業においても、絶対的・相対的低賃金は貫徹していたと、いくつかの調査は報告している。

隣接国家であること、非合法移住者・季節労働者の存在は、メキシコ系労働者の「臨時工」的役割をさらに強めた。景気調整の安全弁的役割になわされたといいかえてもよい。一九三〇年代、大恐慌のもたらした労働力過剰は、約

五〇万のメキシコ人を帰国させるという事態を生んだ。しかもこの五〇万中、半数は合衆国市民権の保有者といわれ諸州・自治体は、救済資金とメキシコ送還の運賃を比較し後者の方が「安い」という判断のもとに、実質的には強制退去に外ならぬ手段をとったのだった。

ひととはともすれば、合衆国が第二次大戦後も多数の移民をうけ入れている事実を忘れやすい。プエルトリコ人(一九四六—五〇年の間に約四〇万)と並んで、メキシコ人は移住をつけ、一九五〇年代に合法的移民は二九万九〇〇〇に達している。加えて「ウェットバックス」という蔑称で一括されるようになった非合法入国者も重要である。メキシコ系労働者は南西部の農業はもとより、第二次大戦後は中西部および東部へと東進を早め、こんにちでは全体として工業労働者としても重要な地位を占めるにいたっている。ここでとりあえず確認しておくべきことは、一九二四年移民法以来、メキシコ系労働者は合衆国低賃金労働者の最大の供給源でありつづけたこと、資本家・雇用主側は強制退去に等しい処置をとりうる条件をつねに有していたこと、そしてさらに、第二次大戦後主として西部で論議の対象となった「メキシコ人問題」とは低賃金労働者をめぐるおそくも一九世紀末以来の取扱いを依然としてこえない様相と内容で問題視されてきたこと——たとえば言語・文化

における「非同化」「不潔」そして全体としてのもう一つの差別の蔵存——である。

(註) 最近数年間、メキシコ系アメリカ人に関する研究が増加しているが、このうち最も簡便な Wayne Moquin & Charles Van Doren, eds, *A Documentary History of the Mexican Americans*, New York, Bantam Books, 1971. 二一 部所収の文献たとえば Isabel Gonzales, *Step Children of a Nation* などを利用した。なお、メキシコ系アメリカ人については、筆者は別稿を予定している。その場合、焦点は低賃金労働者としてのメキシコ系アメリカ人である。

5 今後の課題

奴隷労働者および低賃金労働者としての黒人は、本稿では周知の問題として一応排除したが、今後はとくに一九世紀末以来進行した黒人の賃金労働者化を本稿の論旨に十分にくみいれることが必要と考える。加えて、婦人労働、児童労働についても考察することが不可欠である。さらにいえば、帝国本国のみにとどまらず、ラテン・アメリカをはじめとする世界各地に対する帝国主義的支配における低賃金労働についても、筆者の作業は及ばねばならないであ

アメリカ帝国の発展構造・覚え書(清水)

ろう。冒頭に述べたように、本稿はそうした作業のための出発点であり、いわば筆者を拘束するためのものである。